

カラーブラインド人種主義時代の社会言語学

—世界システム論からの提言—

源邦彦（神奈川大学）

日本の社会言語学に大きな影響を与えてきた米社会言語学の体系化が試みられるようになる契機の一つは、1964年、フォード財団後援、Social Science Research Council (SSRC)主催で行われた言語学者と社会学者による合同研究会にある (Ferguson 1965)。この共同作業の形跡は主にフォード財団に支援を受けた初期の研究に見られ、言語学に限らず社会学や政治学からも多くの寄稿、引用がなされていたことがわかる (e.g. Bender et al. 1976; Cooper 1982; Fishman et al. 1968)。ところが、これらの研究も含めてであるが、明らかに人種主義社会システムを基盤とする言語使用、言語問題、言語計画を研究対象としながらも、人種概念・範疇や主・副要因としての人種が回避され、より大きな人種問題の一部としては扱われていないのである。本研究が強調する人種概念・範疇を用いる、人種要因を主・副要因として位置づける研究手法とは、数世紀にわたり今日まで続く、人種集団に基づき職業的配分、収入、政治的権利を決定づける国内外の世界システムを再生産するプロセスを解明するために不可欠なアプローチを意味している。

米社会言語学が始動した時代は、人種差別の撤廃、人種階層化された資本主義国家システム、世界システムの是正を要求する非白人諸集団による運動が合衆国を中心に世界中を席卷していた。その人種階層化された社会システム、人種差別を分析し解決法を見出すためには、人種集団間の人種主義的経済、政治、社会関係における言語現象プロセスを記述する際、人種概念・範疇、人種要因を中心に据え、その言語使用、言語問題、言語計画を人種問題の一部として調査、分析する必要があった。しかしながら、白人の特権の維持には都合の悪いこのようなアプローチを採用する県究方法¹は排除され、重要な要素を骨抜きにし、現象を都合よく解釈した社会言語学が構築されたのである (e.g. USAID 1961, 1967; Smith 1976)。これは、アメリカが第二次世界大戦後から社会の仕組みを理解しそれをコントロールするために社会学、経済学、政治学などを構築してきたという事情と密接に関連している (Wallerstein 2004²; cf. Berman 1983)。総じて社会科学は非白人諸集団を資本主義的に搾取、抑圧する国内外の社会システムを科学的に正当化し、実在する人種に基づく経済、社会格差を合理化する役割を担ってきたのである。

たとえば社会学や人類学を中心に展開され、最盛期は過ぎ衰退傾向にあるものの、今日の社会科学に根強く残るエスニシティー・パラダイムというものがある (Omi & Winant 2014: Ch. 1; e.g. Ferguson 1959; Labov 1969; cf. Kallen 1924; Myrdal 1944; Park 1950)。これは人種的格差を再生産する白人集団による経済、政治プロセスよりはむしろ非白人諸集団の文化的要因に着目することで、格差の責任を後者に帰する知識体系である (Gallagher 2008: 165)。また、その頃から社会科学の分析概念・範疇、要因として人種が回避されエスニシティー—に基づく集団、すなわち、民族—が代替概念・範疇、要因となり始めてもいた³ (Omi & Winant 2015: 11)。このエスニシティー・パラダイムを含む社会科学のさま

¹ 詳細は Zuberi & Bonilla-Silva (2008) を参照されたい。ラティーノとアフリカ系の混血、米国男性社会学者エドゥアルド・ボニラ=シルバ (注4を参照) は社会科学全体に見られる傾向であると指摘する。

² 米国白人男性政治学者イマニュエル・ウォラースタインは人種を世界システムに組み込まれた各国内システムの主要な編成原理とは見なしていない。彼は米国内にさえも人種主義は存在しないと主張する (cf. Wallerstein 1991)。この点では、筆者を含み、ボニラ=シルバ、米国白人女性人類学者ミッシェル・クリスチャン、米国日系男性社会学者マイケル・オミ、米国白人男性社会学者ハワード・ウィナントなどとは対照をなす。

³ 昨今アメリカ、それに追従する日本のメディアが racism (人種差別) の代替表現として hate crime (ヘイトクライム)

ざまな基準が米欧問わずに数カ国によって構築され、世界中の高等教育・研究機関で消費されている (Grosfoguel 2013)。この点は社会言語学も例外ではない (源 2022)。ラティーノとアフリカ系の混血である米国男性社会学者エドゥアルド・ボンニラ=シルバ、米国アフリカ系男性社会学者トゥクフ・ズベリ⁴はこう指摘する。

科学の規範的序列は白人、男性、ブルジョア、異性愛者であったが今もそうである。(…)ほとんどの人種的被抑圧者は(…)、白人の同僚とともに、「人種」問題の分析に大部分で白人の論理と方法を使用し、人種的現状の再生産に貢献してきた。(…)白人の知識と経験の基盤は、集団として、既存の人種秩序を再生産しやすい人種の知識を生産するよう(自らを)導いている。(Bonilla-Silva & Zuberi 2008: 18, カッコ内は筆者)

以上のような背景の下、白人社会言語学者とこの人々のディスコースを取り入れてきた日本人を含む白人以外の諸集団に属する社会言語学者の大多数は、人種をエスニシティーや国・地域(民)(例: オーストラリア(人)、日本(人))で代用する手法を選択するか、そもそも人種的要因を考慮しない状態にあると考えられる。たとえば、人種をジェンダーやエスニシティーと同じく重要な社会集団や集団要因とみなす社会言語学の入門書(日英書ともに)はほとんど存在しない。⁵ この点に関しては、日本や米欧の社会言語学史を扱った先行研究でも同じ傾向が見られる(e.g. Hazen 2010⁶; Muysken 1985⁷; 井出・金丸 1986⁸; 真田 1986)。1970年代以降の米社会言語学の影響力を鑑みれば、現在の日本の社会言語学は、米欧社会が生産、再生産してきた人種階層化された資本主義的搾取、抑圧と言語使用の相互作用プロセスを人種概念・範疇や人種要因を通じて分析し、そのネオコロニアルな関係性を見いだせるものとはなっていないのではなかろうか(cf. Bashi Treitler 2016)。本研究はそのような疑問から出発している。

そのようなカラーブラインドな知識が厳格さを求める科学においてなぜ再生産されるのか、日本の社会言語学における分析概念・範疇、要因としての人種の位置づけを、日本で発行される社会言語学雑誌三誌における人種概念・範疇の使用頻度、使用法を分析し、この社会科学の企ての一面を捉えたい。この分析に先立ち、今日の社会言語学に特定の概念・範疇、方法、理論、解釈を提供している人種階層化された世界システムの在り方が、日本の人種的、民族的序列—この序列が日本の社会言語学の在り方に影響を与えると考える—toどのような影響を与えているかにも触れておく。米国日系女性社会学者イワタ・ミホと日本人女性社会学者根本宮美子という。

日本の支配的な人種イデオロギーはグローバルな国民国家ヒエラルキー、日本国家の人種プロジェクトを反映し、それは結果として日本人の個々人によって内面化され、ローカルレベルで人種的諸行為が強要される(…)ホワイテネスと西洋性は人種的に優れたものと評価され、その一方でグローバルサウスの人々は文化的に後進的で、コミュニティの道徳的水準の保全にとって有害でありうると理解される(…)これらの異なった移民に対する構造的な位置づけ(ビ

を用いるようになったが、まさに同じ現象といえる。

⁴ 筆者が研究者の人種等の集団的属性を明文化する理由は、学問を「決して中立的なものではなく、現在の研究の産出は、(非)支配集団のアジェンダ、利害、価値観によって特徴づけられるより広い社会関係のフィールドで生じる」(Goar 2008: 192, カッコ内は筆者)ものと理解し、この点に読者の注意を向ける狙いがある。

⁵ スペイン白人男性批判的ディスコース分析学者トゥーン・ヴァンダイクは、「(入門書で)学者は支配的な科学理論、研究、哲学を纏めている」(van Dijk 1993: 164)と観察する。入門書は当該分野の主流パラダイムを知る上で重要な判断材料となる。

⁶ 米欧のみを対象とする。

⁷ 米欧のみを対象とする。

⁸ 米欧のみを対象とする。

ザによって低技能就労者はグローバルサウス、高技能就労者は米欧出身者という恣意的な移民政策）は、国家の人種プロジェクトを通じ、職業、住居、日常生活で不平等な生活上の安全性を提供する（Iwata & Nemoto 2018: 315-316）。

すなわち、日本の社会言語学は、基本的には人種を主要概念・範疇、要因として扱っていないと仮定されるだけでなく、以上のような世界システムに組み込まれた人種的、民族的序列に基づいてテーマが設定され、議論の方向性が定められていると推定される。

それでは、三つの社会言語学誌の調査結果を見てゆこう。主な調査項目は以下の三つに分類される。

(1) 主要調査対象となる各社会集団（人種、エスニシティー、ジェンダー、年齢、職業など）とことばの関係を扱う論文数、(2) 分析概念・範疇、主・副要因として人種を使用すべき／すべきでない場面でのその使用法の類型と各類型の論文数、(3) 分析概念・範疇、主・副要因として人種を使用すべき／すべきでない場面での集団概念・範疇使用法の各類型のディスコース分析、である。

まず、社会集団の言語現象を扱う研究という観点からすると、その社会集団概念はエスニシティー、職業、年齢、ジェンダー、人種の順に取り扱い件数が多いことがわかった。最も多いエスニシティーに相当する集団概念は全 684 本中 418 本 (61.1%)、人種は 1 本 (0.1%) である。人種階層化された資本主義世界システム内に位置づけられる日本社会にも人種階層は存在し、言語現象に関連した人種差別が存在するにもかかわらず、人種を主要概念・範疇、要因として問題を議論する研究はこれら社会言語学三誌にはほぼ存在しないのである。さらに指摘しておくべき点は、この唯一の研究は日本国内に身を置きその立ち位置から人種集団の言語現象を論じたものではないという点である。

一方で、これは日本の社会言語学研究の中に人種要因が言及あるいは議論されていないということではない。実は、主にエスニシティーを主要概念・範疇、要因として議論する論文の中に、部分的にはあるものの人種要因に触れている研究の総数は 96 本 (14.0%) に上ることがわかっている。これは米国の社会科学メインストリームにおける人種概念・範疇、要因の扱われ方と類似している。人種要因はエスニシティー概念・範疇の一部の構成要素とされエスニシティーが代替概念・範疇として用いられるエスニシティー・パラダイムが用いられている。そしてこの 96 本中に、日本の社会言語学誌における人種概念・範疇、要因の扱われ方として、筆者は以下三つの類型を見出した。1) 分析概念・範疇、主・副要因として人種を用いるべき場面でエスニシティー等を代用するケース、2) 分析概念・範疇、主・副要因として人種を用いるべきでない場面で人種を用いる（あるいは人種とエスニシティーを混用する）ケース、3) 分析概念・範疇、主・副要因として人種を用いるべき場面で人種を用いるケース、である。1) のケースが最も多く全 96 本中 81 本 (84.4%) を占め、これが筆者が批判対象とするカラーブラインド・ディスコースの主流を形成する。2) の場合も米欧の社会科学に見られる典型的なディスコースであり、たとえば、同一人種集団内の異民族間の抑圧、抵抗の関係を異人種集団間の問題として描くものである。そして、3) は人種を主要概念・範疇、要因とし、人種階層化された世界システムに位置する日本社会の人種階層化された国家システムという視座から人種と言語の問題を扱っている（1 本 (1.0%)）。この最後の研究の在り方こそが、日本の社会言語学がこれまで正面から扱ってこなかった言語現象として筆者が反省を迫るものである。

参考文献

- Bashi Treitler, V. & Boatcă, M. (2016). Dynamics of inequalities in a global perspective: An introduction. *Current Sociology*, 64, 2, 159-171.
- Bender, M. L., Bowen, J. D., Cooper, R. L., & Ferguson, C. A. (1976). *Language in Ethiopia*. London: Oxford University Press.

- Berman, E. H. (1983). *The influence of the Carnegie, Ford, and Rockefeller Foundations on American foreign policy: The ideology of philanthropy*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Bonilla-Silva, E. & Zuberi, T. (2008). Introduction. In Tukufu Zuberi and Eduardo Bonilla-Silva (eds.), *White logic, White methods: Racism and methodology*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 3-27.
- Cooper, R. L. (1982). *Language spread: Studies in diffusion and social change*. Bloomington, IL: Indiana University Press.
- Ferguson, C. A. (1959). Diglossia. *Word*, 15, 2, 325-340.
- Ferguson, C. A. (1965). Directions in sociolinguistics: Report on an interdisciplinary seminar. *SSRC Items*, 19, 1, 1-4.
- Fishman, J. A., Ferguson, C. A. & Gupta, J. D. (eds.). (1968). *Language problems of developing nations*. New York: Wiley.
- Gallagher, C. A. (2008). "The end of racism" as the new doxa. In Tukufu Zuberi and Eduardo Bonilla-Silva (eds.), *White logic, White methods: Racism and methodology*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 163-178.
- Goar, C. (2008). Experiments in Black and White: Power and privilege in experimental methodology. In Zuberi, T. & Bonilla-Silva, E. (eds.), *White logic, White methods: Racism and methodology*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 153-162.
- Grosfoguel, R. (2013). The structure of knowledge in Westernized universities: Epistemic racism/sexism and the four genocides/epistemicides of the long 16th century. *Human architecture: Journal of the sociology of self knowledge*, 11, 1, 73-90.
- Hazen, K. (2010). The sociolinguistics in the United States of America. In Ball, M. J. (ed.), *The Routledge handbook of sociolinguistics around the world*. New York: Routledge, pp. 7-24.
- 井出祥子 & 金丸扶美. (1986). 欧米の社会言語学の動向—二つのジャーナルの分析から 『日本語学』 5, 12, 85-98.
- Iwata, M., & Nemoto, K. (2018). Co-constituting migrant strangers and foreigners: The case of Japan. *Current sociology*, 66, 2, 303-319.
- Kallen, H. (1924). *Culture and democracy in America*. New York: Boni and Riveright.
- Labov, W. (1969). The study of nonstandard English. Urbana Champaign, IL: National Council of Teachers of English, by special arrangement with the Center for Applied Linguistics.
- 源邦彦 (2022). 社会言語学の再構築に向けて—「人種」の主要概念化— 玉川大学文学部紀要『論叢』 62, 69-90.
- Muysken, P. (1985). 20 years of sociolinguistics. *Sociolinguistics newsletter*, 15, 2, 12-19.
- Myrdal, G. (1941). *An American dilemma: The Negro problem and modern democracy*. New York: Harper & Row.
- Park, R. E. (1950). *Race and culture*. Glencoe, IL: The Free Press.
- Omi, M. & Winant H. (2014). *Racial formation in the United States*. New York: Routledge.
- 真田真治 (1986). 社会言語学の方法 『日本語学』 12 月号, 明治書院, 4-12.
- Smith, L. E. (1976). English as an international auxiliary language. *RELC journal*, 7, 2, 43-44.
- USAID. (1961). The act for international development: A program for the decade of development, objectives, concepts and proposed program.
- USAID. (1967). English language programs for the Agency for International Development.
- Wallerstein, I. M. (1991). Social conflict in post-independence black Africa: The concepts of Race and status-group reconsidered. In Balibar, E & Wallerstein, I. (eds.), *Race, nation, class: Ambiguous identities*. New York: Verso, pp. 187-203.
- Wallerstein, I. M. (2004). *World-systems analysis: An introduction*. Durham: Duke University Press.